荻原井泉水先生のこと

須藤松雄

昨年は、喜田貞吉先生のことを書きました。喜田先生も荻原先生も有名人ですから、人名辞典、文学史などを見れば載っているにきまっているのですが、喜田先生というたった一人の方、荻原先生というたった一人の方の面目に直接触れた貴重な感銘を書いておきたいのです。

わたくしが以前関係していた学校の講師として荻原先生は週に一度おいでになり、わたくしは、学生さんの後ろに腰かけて聴講させていただきました。芭蕉についてのお話でした。孫のような学生さんに、わかりやすくお話になるのですが、なるほどと感じさせられるところが多く、その時間を楽しみにしておりました。そのうちに、こういうことに気が付きました。いつもにこやかにお話になる先生が、高浜虚子のことになるとなかなか以て手厳しいのです。しかしそれも次第にいかにも自然な感じで拝聴するようになりました。

要するに先生は、わたくしのような単なる教師ではないのです。虚子を総帥とするホトトギス派を敵として自由律の俳句を主張し、何十年も戦って来られた実作者なのです。ホトトギス派の俳句はこんなもの、それに対して碧梧桐や井泉水の自由律の俳句はこんなものというような、何だか毒にも薬にもならないようなことを話しているわたくしのような単なる教師ではないのです。実作者が、わが信ずる文学を樹立するためには、対立する文学と戦ってこれを倒す一手しかありません。荻原先生は何十年も、そういう戦いを（おそらく悪戦苦闘というべき戦いを）戦って来られた方です。老熟した先生の、にこやかなお話に折折感じられた手厳しさは、先生を支えて来た闘魂の面影だったに違いありません。

学校の応接室で荻原先生と雑談をしてい

たとき、「去来抄」に出ている凡兆の「下京や雪つむ上のよるの雨」が話題に上りました。

「去来抄」は、次のように記しています。凡兆が「雪つむ上のよるの雨」と作った。まだ冠（初五―最初の五文字）が出来ていない。皆で考えたが、芭蕉は「下京や」に決定した。凡兆は、「下京や」が唯一無上の冠だと、直ちには感得しえなかった。その凡兆の様子を叙した「去来抄」の文が、簡潔で要を尽くした名文です。

「凡兆、あトこたへて、いまだ落つかず。」

何かモジモジしている凡兆に対する芭蕉の詩人的癇癪の表現も、なかなかいい文章です（おそらく芭蕉は、これと似た激しい言葉を迸らせたのでしょう）。

「兆、汝手柄に此冠を置べし。若まさる物あらば、我二度俳諧をいふべからず、」（凡兆、お前の手柄になるから「雪つむ上のよるの雨」の冠（初五）を置いてみよ。おれの置いた「下京や」以上のが出来たら、おれは今後決して俳諧の指導めいたことはロにしない）

唯一最高の表現を探り当てた詩人の自信は、こうあってこそ本当で、芭蕉は本物の詩人だったのです。

「下京や」をめぐるお話が、一しきり終わったところで、荻原先生が何とおっしゃったと思われますか？　先生は、昭和五十一年、九十三歳でなくなられました。その先生が七十歳台だったと思いますから、「下京や」の句をめぐってお話を承ったのは、今から三十何年前のことです。笑を含みながら先生は静かにこうおっしゃいました。低いが、若若しいお声でした。

「下京や、の無い方が、ポエジーとして上等だったのですがね。」（「ポエジー」も、「上等」も、先生の言葉どおり）

「下京」という、いかにも日本風の雰囲気から解放され、特に五七五の定型から解放され、「雪つむ上のよるの雨」は、先生の精神の奥で確乎たる一つの詩として立っていたのです。

「下京や、の無い方が、ポエジーとして上等だったのですがね」というお言葉によって、自由律俳句の主張者、井泉水先生の面目に直面させられたあの瞬間は、やはりわたくしの貴重な精神的財産になっているようです。

〔付記〕「去来抄」に「凡兆、あトこたへて、いまだ落つかず。」とありました。芭蕉の定めた冠（初五）の美事さが、感受性抜群の凡兆の心魂に徹したことは無論ですが同時に、最初、自分の心に浮かんだ七五「雪つむ上のよるの雨」の微妙な詩感は、どうなるのかしらと愛惜するような気持―それが凡兆の「いまだ落つかず。」という態度に関係していないか、というのがわたくしの想像なのですが、いまだにこの想像を捨てかねております。